# 「曾谷殿御返事」講義

建治二年　五十五歳御作

（御書全集一〇五五㌻～一〇五六㌻）
編年体御書　九二九㌻～九三〇㌻）

この「曾谷殿御返事」は、別名「成仏用心抄」ともいわれております。私たちが成仏するためには、信心修行において、なにが肝要なのかを指導された重要な御書であります。

曾谷殿というのは、曾谷教信のことで、法名を法蓮といい、下総国（今の千葉県）に住んでいた武士であります。富木常忍や大田乗明とともに日蓮大聖人のもとで強盛な信者として戦ってきたひとりであります。

夫れ法華経第一方便品に云く「諸仏の智慧は甚深無量なり」云云、釈に云く「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量と云う」と、抑此の経釈の心は仏になる道は豈境智の二

「第一方便品に云く」とは、第一の巻、方便品第二にいわく、という意味です。法華経は八巻に分かれていますから、その第一です。

「諸仏の智慧は甚深無量なり」と説かれている。ひとくちにいうならば「諸仏智慧甚深無量」とは、大御本尊の智慧は甚深無量である。日蓮大聖人のお智慧は甚深無量である、と拝するのであります。

その方便品の経文を、天台大師が釈して、法華文句にいわく「境淵無辺なる故に甚深と云い智水測り難き故に無量」――と。

「境淵無辺なる故に甚深云云」ということは、時間的に約すならば、永遠であり、空間的に論ずるならば、宇宙の広さそれ自体である、これが御本尊の智慧であり、日蓮大聖人の智慧である、このように天台も釈しているというのです。

そして、大聖人は「仏になる道は豈境智の二法にあらずや」と結論づけられているのです。

南無妙法蓮華経を境とするならば、日蓮大聖人が智になるのです。したがって、法本尊、人本尊、境智の二法の境智冥合の御当体が、三大秘法の御本尊になるわけです。

また、私ども信心する立場からいうならば、大御本尊が境です。私どもの信心が智になるのです。そして、境智冥合して仏になれると、こういう原理になります。

されば境と云うは万法の体を云い智と云うは自体顕照の姿を云うなり

「万法の体」とは、あらゆる森羅万象の本源、本体のことで、その究極は南無妙法蓮華経です。これを境という。

智とは、妙法による智慧の働きです。その智慧の働きによって、万法の体がそのあるがままの姿で照らしあらわされることが、「自体顕照」になります。すなわち、妙法の智慧の光によって、宇宙の万物が南無妙法蓮華経と照らしあらわされるのです。したがって、智とは、日蓮大聖人と拝してもよろしいわけです。また「万法の体」が本尊、境です。

またこんどは逆に、御本尊の智によって、信心する私どもの生活、生命活動が境になり、自体顕照の姿になるのです。

すなわち、最高の生命力の本源である御本尊に照らされ、おのおのの境遇にあって、おのおのの使命にたって、有意義にすこしのムダもなく、最高度の人生を生ききっていける、そういう生命活動、生活活動を、自体顕照の姿ともいえると思うのです。

本尊とは根本尊敬、功徳聚とも輪円具足とも説かれておりますけれども、根本尊敬の、根本の「本」、そして尊敬の「尊」で、「本尊」といわれます。

その本源の当体を一幅の御本尊と顕された、当体として顕されたのは、日蓮大聖人だけなのです。

それが日蓮大聖人の出世の本懐です。

この大宇宙の現象世界をなすあらゆる森羅万象、あらゆる生死を起こし、滅せしめていく法則、それが妙法であり、それを具体的に、現実に御図顕してくださったのが御本尊です。ですから、あらゆるものの本源、根本の当体、それが本尊なのです。

その御本尊に南無していけば、大宇宙のリズムに合致して生きいきとした生活を送ることができるし、さらに永遠の生命を感得できるわけですから、願いはかなうし、病気が治ったり、商売がよくなったりすることは、その過程として、当然の道理です。

而るに境の淵ほとりなく・ふかき時は智慧の水ながるる事つつがなし、此の境智合しぬれば即身成仏するなり

「境の淵ほとりなく・ふかき時は」、すなわち御本尊はそれ自体、宇宙大の広さと深さがあり、際限がないがゆえに、「智慧の水ながるる事つつがなし」、すなわち智恵の水、御本尊の力、働きというものは、とどこおることはないのです。

私たちの生命に約していえば、私たちの生命もまた、本来、宇宙大の妙法の当体であるという境であり、御本尊に南無することによってそれを覚知し、仏界の境に合致した智をあらわしたとき、即身

成仏するのです。ゆえに日寛上人は、御本尊を境、題目を唱えることが智、御本尊に唱題する姿を境智冥合であると教えられています。

われわれは、すぐ人生に行き詰まりましたとか、やれ商売に行き詰まってしまったとか、そういうグチをこぼしますけれども、日蓮大聖人の智水は永遠に行き詰まりはありません。

したがって、日蓮大聖人即御本尊を私どもは受持しているのですから、境智冥合して等しくなるのですから、ほんとうは行き詰まるわけはないのです。ですから、行き詰まってしょうがないという人は、まだ信心が弱いと、自身を反省してください。「御本尊には行き詰まりがない」とここにおしたためなのですから。

また、よく「こんなに信心しても功徳が少ない」「すこしも変わらない」という人がおりますけれども、それはウソです。それは御本尊と境智冥合していない証拠です。

また、御本尊を受持しきって信心に励んでいけば、人生を満喫し、永遠の生命、幸福を感得することも、この御文を拝して事実です。絶対の確信をもって、大聖人はいいきられています。どうか皆さん方も、なにがあっても御本尊を根本として、信心強盛にがんばっていきましょう。

法華以前の経は境智・各別にして而も権教方便なるが故に成仏せず、今法華経にして境智一如なる間・開示悟入の四仏知見をさとりて成仏するなり、此の内証に声聞・辟支仏更に及ばざる

ところを次下に一切声聞辟支仏所不能知と説かるるなり

爾前経は境智冥合ではなく、境智各別である。空・仮・中の三諦を説ききってない権教方便の教えである。したがって、成仏しない、幸福になることはできない、と断じていらっしゃるのです。

今、法華経においては、別しては三大秘法の御本尊のみが「境智一如」である。

そもそも方便品に説かれているように、仏の出世の目的は、「開示悟入の四仏知見」にある。すなわち衆生をして仏知見を開かしめんと欲し、または仏知見を示し、仏知見を悟らしめ、仏知見の道に入らしむ――これが仏の目的である。

開とは信心の異名です。信心をもって南無妙法蓮華経と唱えることが、仏知見をわが生命に開くことになる（開仏知見）。そうしたとき、仏は、その衆生の生命が妙法の当体であることを示し（示仏知見）、現実の自分の世界を常寂光土と悟り、みずからも即身成仏できると確信するのです（悟仏知見）。そのときこそ、仏界に照らされ、いかなる縁にも紛動されない人生になる（入仏知見）ことができるのです。

したがって、私たちが御本尊に題目を唱える信心があってはじめて四仏知見を開示悟入し、成仏することができるのです。

「声聞・辟支仏」とは、声聞、縁覚の二乗であります。「内証」とは南無妙法蓮華経です。

方便品に「諸仏の智慧は甚深無量なり」とあり、その次下に「一切声聞辟支仏の知ること能わざる所なり」とあるのは、いっさいの声聞、縁覚は、仏の内証である妙法蓮華経のこの大仏法を、とうて

い知ることができないというのです。

ですから、いまもって学者や評論家など、指導階層といわれる人々が、日蓮大聖人の三大秘法の仏法、一念三千の理法を知るわけがないのも当然です。知らないのに批判していること自体、たいへん残念であるといわざるをえません。

この妙法蓮華経といい、また一念三千といい、境智の二法といい、境智冥合といい、ぜんぶ同じことなのであります。境智冥合しないところに不幸があるのです。

資本家も政治家も、労働者も、全人類が等しく願う幸福と平和は、日蓮大聖人の仏法と境智冥合するならば、すみやかに仏国土の確立ができると、このように私は確信するしだいであります。

> 此の境智の二法は何物ぞ但南無妙法蓮華経の五字なり、此の五字を地涌の大士を召し出して結要付属せしめ給う是を本化付属の法門とは云うなり

この「境智の二法」とは、いままでの講義でもおわかりのように、結局は境も智もともに、南無妙法蓮華経のことであるというのです。

この妙法蓮華経の五字を「地涌の大士」――これは地涌の菩薩の上首である上行菩薩です――を召しいだして「結要付属」をした。これを「本化付属の法門」というのである。

すなわち、迹化の付嘱は総付嘱といわれ、法華経嘱累品で行われ、これは三摩の付嘱ともいわれております。それに対して本化の付嘱は、これは別付嘱といわれ、神力品です。これは皆さん方もよくおわかりであると思います。「如来一切の所有の法」「如来一切の自在の神力」「如来一切の秘要の蔵」「如来一切の甚深の事」――この四句の要法をもって、上行菩薩に付嘱をしたのです。これは三大秘法の付嘱を意味しております。

然るに上行菩薩等・末法の始の五百年に出生して此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべしと見えたり経文赫赫たり明明たり誰か是を論ぜん、日蓮は其の人にも非ず又御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり、既に上行菩薩・釈迦如来より妙法の智水を受けて末代悪世の枯槁の衆生に流れかよはし給う是れ智慧の義なり、釈尊より上行菩薩へ譲り与へ給う然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む

「上行菩薩等」とは、上行、それから無辺行、浄行、安立行の四菩薩をさす意味で、上行等とおおせになったわけであろうと思いますが、別しては上首の上行菩薩です。

上行菩薩が「末法の始の五百年」に出現して「此の境智の二法たる五字を弘めさせ給うべし」と。この境智の二法たる五字とは「南無妙法蓮華経」と拝します。

法華経薬王品には「我が滅度の後、後の五百歳の中に、閻浮提に広宣流布して断絶せしむることなけん」と、また勧発品にも「如来の滅後に於いて、閻浮提の内に広く流布せしめて、断絶せざらしめん」とあります。このように五濁悪世の末法において、上行菩薩が南無妙法蓮華経を流布することは、経文に赫々とでている、だれが疑う必要があろうかというのです。

「日蓮は其の人にも非ず」――日蓮大聖人は、その妙法蓮華経を弘める人ではないのだが、これは御謙遜のお立場でこのようにいわれています。

「御使にもあらざれども先序分にあらあら弘め候なり」、また「然るに日蓮又日本国にして此の法門を弘む」ということは、内証では日蓮大聖人が上行菩薩であり、さらには御本仏であるということを確信していらっしゃることになります。

いまだかつてだれびともなしえなかったことを、大聖人がなされたことは、厳然たる事実です。御自身の実践の姿をもって実証されているのです。

上行菩薩が釈迦如来より妙法蓮華経を相伝されて、末代悪世の枯れた衆生に、不幸の衆生に、この妙法蓮華経を流す、弘めてあげる、これが「智慧の義」というのである、というのです。これはあくまでも外用の立場で論じているわけです。

日蓮大聖人は、御内証は「久遠元初の自受用報身如来再誕日蓮」です。「久遠元初自受用報身如来垂迹上行」です。その再誕の日蓮です。ゆえに、釈尊から「妙法の智水」をうけたとなっていますが、大聖人はもともと御自身が「妙法の智水」をおもちなのです。釈尊といえども南無妙法蓮華経に

よって仏になったのです。

今、私たちもまた、大聖人の遺された偉大な御本尊を持つことによって、わが生命にゆたかな知恵がわき、うるおいに満ちた幸せな人生を送ることができるのです。

又是には総別の二義あり総別の二義少しも相そむけば成仏思もよらず輪廻生死のもといたらん

「総別の二義」です。簡単にいえば、総とは全体的、一般的な意義であり、別とはそのなかに含まれる特別、肝要の意義です。

総別の二義を少しでもたがえるならば、成仏できない。ここは大事なところです。

総じては、本化地涌の菩薩に仏法をゆずった、しかし別しては、上行おひとり、すなわち日蓮大聖人にゆずられたと、こう読まないとまちがいを起こすのです。

すべてこうなるわけです。たとえていえば、総じては一切衆生は仏なり、別しては日蓮大聖人おひとりです。総別の二義をわきまえないと「日蓮大聖人は一切衆生は仏なりとおっしゃっている。だから自分は仏である。信仰など必要ない」と、こういうふうになってしまうのです。

私たちの信心に約していえば、総じては、あくまでぜんぶ御本尊の子供である。だが、別しては、折伏行に励み、広宣流布に進んだ人が、まことの弟子である。また総じては、御本尊を持った者に

は、みな功徳がある。別しては、日蓮大聖人のおおせどおりに信心しきったものだけに功徳がある、成仏できる。こういうことになるでしょう。

その総別の二義をたがえるということは、つまり日蓮大聖人、即御本尊が成仏の根源であることを知らないからであり、それで成仏することができないのです。仏法といえば、総じていえば、「一切法皆これ仏法なり」で、ぜんぶ仏法ではある。しかし別しては、日蓮正宗以外に仏法は断じてない。こうなります。

例せば大通仏の第十六の釈迦如来に下種せし今日の声聞は全く弥陀・薬師に遇て成仏せず譬えば大海の水を家内へくみ来らんには家内の者皆縁をふるべきなり、然れども汲み来るところの大海の一滴を閣きて又他方の大海の水を求めん事は大僻案なり大愚癡なり

三千塵点劫における大通智勝仏の十六番目の王子、これが過去世の釈尊であります。そのときこの釈迦如来に下種をされたのが、今日の声聞です。今日というのはインドの釈尊の在世です。それらの声聞は、阿弥陀如来や薬師如来にあっても成仏することはできない。釈迦如来に下種された人は、あくまでインド応誕の釈尊にあって、はじめて成仏するものであるというのです。

あくまでも釈尊に下種をされた衆生は、釈尊によって仏になるのであるということです。他の仏、

菩薩にあっても、絶対に成仏することはできない。大御本尊にお目にかかった私どもは、当然、大御本尊を受持しきって仏になるのです。ほかの鬼子母神や、立正佼成会や霊友会に行っても、仏になれようはずがないというのです。

また、この末法の衆生というのは、久遠元初の自受用報身如来に成仏の本種をただちに下種されなければ成仏はできません。

日本の国にある世界最高の大仏法こそ、その下種益の仏法である。この日本の大仏法によって、日本の人々も、全世界の人々も利益し、救うことができるのです。

いまの指導者に、この御文を目をあけて読みなさいといいたいのです。そして日本の国に七百年のあいだ、世界最高の仏法があることに気がつかないで、認識もせずして、そういう指導者が表にたって日本の国を指導しているから、いくらたっても日本の国はよくならないのです。

一日もはやく、皆さん方が成長して、世界的な指導者になっていただかなければ、世界の平和は絶対にないと、こういう確信で進んでください。

法華経の大海の智慧の水を受けたる根源の師を忘れて余へ心をうつさば必ず輪廻生死のわざはいなるべし

「根源の師」とは、日蓮大聖人です。また人法一箇の御本尊です。日蓮大聖人は、一往、念仏や禅宗や真言宗等を打ち破ろうとなされて、当時の人々の心を、釈尊へ釈尊へ、法華経へ法華経へと、もどしていらっしゃるのです。

一度、釈尊へ、法華経へともどってみれば、それがぜんぶ末法の予言書であることがわかるではないか。上行菩薩の出現のときではないか。上行菩薩の出現といえば、日蓮大聖人しかいないではないか。こういう論理で説かれているわけです。

現在、釈尊の予言どおり、そして大聖人の御指導どおり、根源の師を忘れず信心修行に励んでいるのは、われわれしかないのです。

「輪廻生死のわざはい」とは、永久に不幸になるということです。御本尊を忘れ、正しい仏法を忘れ、日蓮大聖人を忘れるならば、個人も国も、かならず永久に不幸になるのです。

> 但し師なりとも誤ある者をば捨つべし又捨てざる義も有るべし世間・仏法の道理によるべきなり

師であっても、師匠であっても、誤りのある師匠を捨てるのは当然です。日蓮大聖人は正しい師匠です。

しかし、師匠に細かいところで誤りがあっても、捨てない場合もあります。

この点については、「世間・仏法の道理によるべきなり」、世間、仏法の道理によって判断していきなさいというのです。

世間でも悪い師匠は捨てるべきである。よい師匠はもたなくてはいけない。仏法も同じである。まちがった時代不相応の、機根不相応の法を説いている師匠は捨てなさい。その時代の仏さまの仏法、そしてまた、それを説く師匠を求めなさい、たもちなさいというのです。

世間の例をみた場合には、音楽の勉強をしようと志したときには、音楽の師匠につくべきであります。法律の先生についてもなにもなりません。

成仏する道も同じです。末法の御本仏である日蓮大聖人を師匠にしないで、邪宗教の僧を師匠にしたりしていくことはまちがいであると、こういう意味なのです。

末世の僧等は仏法の道理をば・しらずして我慢に著して師をいやしみ檀那をへつらふなり、但正直にして少欲知足たらん僧こそ真実の僧なるべけれ

末法の日蓮正宗以外の僧は、仏法の道理を知らないというのです。折伏してみておどろくように、いまの邪宗教の僧に、仏法の道理がわかるはずがないのです。日蓮大聖人は、他宗の僧たちを、仏法

の道理を知らないにもかかわらず増上慢であると、七百年前に断言していらっしゃいます。

「我慢に著して師をいやしみ」――そうした僧たちは、我をたのみ、おごるあまり、師を軽んじているのです。したがって、釈尊のいうことをきかない、また天台大師のいうことも、伝教大師のいうこともきかない、さらに末法の御本仏である日蓮大聖人のいうことをもきかないのです。

それであって、「檀那をへつらふ」、信徒のきげんをとるのです。

「但正直にして少欲知足」――これが真実の僧である。日蓮正宗の御僧侶方であります。日蓮正宗の御僧侶だけは、仏法の道理を知っていらっしゃるのです。日蓮正宗の御僧侶は少欲知足であります。そしてまた、日蓮大聖人のおおせのとおりの真実の僧になるのです。

文句の一に云く「既に未だ真を発さざれば第一義天に慙じ諸の聖人に愧ず即是れ有羞の僧なり
観慧若し発するは即真実の僧なり」云云

文句にいわく「既に未だ真を発さざれば」――すでに真実の仏法を求めなければ、正しい仏法を求め、正しい信心をしなければ、「第一義天に慙じ」――ひとくちにいえば、成仏できないということです。「第一義天」というのは、仏菩薩の所持する中道の妙義をいうのです。

「諸の聖人に愧ず」――仏さまに愧ず、三世十方の仏にも笑われるというのです。

そのことを真実の仏法を求めるバネにしていくことができるものは、「有羞の僧」である。求めきらなければたいへんだという心がけがあるから、恥を知っている僧であるというのです。日蓮正宗を除いては、いまの宗教界は、恥を知らない僧ばかりです。感情、偏見、我執、名聞名利、打算の僧ばかりです。有羞の僧ではないのです。

日蓮大聖人の時代においては、他宗の僧でも、日蓮大聖人と佐渡の国で法論して、日蓮大聖人に負けると、その場で数珠を切って弟子になっています。そういうことは、多々あったわけです。

いま、いくら折伏をしようが、議論をしようが、道理正しい仏法に歯がたたなくなっても、それでも感情だけ、我執だけであって「自分がまちがっていた。これからは正しい仏法を求めよう」という、こういう僧は絶対におりません。また、そういう人々も少ないわけです。

「観慧若し発するは即真実の僧なり」――正しい仏法を求め、正しい仏法を信ずる人は、真実の僧である。「観慧」とは、正しい仏法を信心することをいいます。

涅槃経に云く「若し善比丘あって法を壊る者を見て置いて呵責し駈遣し挙処せずんば当に知るべし是の人は仏法の中の怨なり、若し能く駈遣し呵責し挙処せんは是れ我が弟子真の声聞なり」云云、此の文の中に見壊法者の見と置不呵責の置とを能く能く心腑に染む可きなり

これは涅槃経の文です。釈尊もこのように戒めているわけです。また、日蓮大聖人も御遺命されています。折伏をする以外にない。折伏をせよ、というおおせなのです。これ以外に人々を幸せにする道もないし、宗教革命もないし、個人の成仏もありえないと、こういうのです。

「呵責し駈遣し挙処せずんば」

「呵責」とは相手の非を呵り責めること、「駈遣」とは対治すること、「挙処」とは罪をあげて糾明し、処断することで、ぜんぶ折伏になります。

正法誹謗の者をみていながら折伏しなければ、その人は「仏法の中の怨なり」と。

あまり折伏などしないほうが人にはきらわれないし、人格者みたいに思われてかっこうがつくようだけれども、その人は仏法のなかの怨である、敵である、と厳しく断言されています。そういう人は成仏できるわけがありません。

その反対に「若し能く駈遣し呵責し挙処」する者は「是れ我が弟子真の声聞なり」——と。

涅槃経等においては声聞が対告衆でありましたから、真の声聞なりとおおせなのです。

私どもは日夜、折伏行に励んでいるのですから、真の弟子です。ぜんぶ等しく、日蓮大聖人のおおせどおりに、成仏できないわけは絶対にない、と私は確信します。

「見壊法者の見」——法をやぶる者を見ての、この「見」、それから「置不呵責」——置いて呵責せずの「置」、この字をばよくよく心腑にそめなさい。絶対に謗法をみたならば、そのままおいておかないという、その自覚をもって信心修行をしなさい、とこうおおせなのです。

法華経の敵を見ながら置いてせめずんば師檀ともに無間地獄は疑いなかるべし、南岳大師の云く「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」云云

大御本尊を誹謗し、日蓮大聖人の仏法を批判する者をみて、そのまま放置しておくならば、師も檀那もともに地獄に堕ちるというのです。

天台大師の師匠である南岳大師も「諸の悪人と俱に地獄に堕ちん」と述べています。

私たちはただ、日蓮大聖人にほめていただければいいのだし、日蓮大聖人にほめていただくことは、三世十方の仏菩薩も賛嘆してくれることでもあるのだし、また、多くの同志がみんな知ってくれているのですから、人々がすこしぐらい悪口をいおうとも、新聞などですこしぐらい批判されようとも、勇ましく、忍耐強く、しかも楽しく、日本国中の人々を、ひとりももれなく折伏しきるとの決意をもって戦いましょう。日本が終わったら、それでいいというわけではありません。全世界もあるのです。

御本尊は宇宙大です。地球の一つぐらいはちっぽけなものです。地球をのんでいくような大きい境涯をもってがんばってまいりましょう。

謗法を責めずして成仏を願はば火の中に水を求め水の中に火を尋ぬるが如くなるべしはかなし・はかなし、何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし、うるし千ばいに蟹の足一つ入れたらんが如し、毒気深入・失本心故は是なり

「謗法を責めずして」云云。

折伏をしないで仏になるということは、これは火のなかに水を求め、水のなかに火を求めるようなものである。折伏しなければ、絶対に成仏できないというのです。

創価学会は折伏の団体です。創価学会から「折伏」の二字をとったならば、もうなにもないのです。世間では折伏が強すぎるとか、こわいとか、なにやかやいいますけれども、釈尊も折伏せよ、日蓮大聖人も折伏をせよ、とおおせなのです。折伏すれば絶対に成仏できるのです。

「何に法華経を信じ給うとも謗法あらば必ず地獄にをつべし」

御本尊を持って、強盛に信じているようであっても、謗法がわずかでもあるならば、地獄に堕ちるという御文です。

たとえば、大量のうるしがあって、そのなかに蟹の足をわずかでも入れてしまうと、うるしの効力がなくなってしまう。それと同じ道理だというのです。また、うるしにかぶれた場合には、蟹をつけるとかぶれがなおるといわれております。

「毒気深入・失本心故は是なり」――これは寿量品の御文です。「毒気深く入って、本心を失えるが故に」と読みます。謗法の害毒が体内に深く入って本心を失ってしまうために、正法（御本尊）を信じようとしないことをさします。

ここで大事なことは「十四謗法」という謗法があるということです。その十四の謗法のなかでも、御本尊を持って、まじめに信心していくならば、初めから十の謗法はまぬかれます。不信謗法とか、不解の謗法とか、それは皆さん方もごぞんじであろうと思います。

しかし、最後の四つの謗法には、とくに気をつけなければなりません。この謗法があるかないかで、功徳がでるか、また罰を受けるか、生活がうまくいかないとかが決まってしまうのです。

この四つの謗法は、まず「軽善謗法」――御本尊を持っている人をバカにすることです。

それから「憎善謗法」――御本尊を持っている人を憎むということです。御本尊を持っている人を憎みながら題目をあげてごらんなさい、絶対に罰を受けます。

それから「嫉善謗法」――怨嫉です。御本尊を持っている人を怨嫉するのが嫉善謗法です。

それから「恨善謗法」――恨むことです。これはもうだめです、地獄です。

以上、四謗法は、いちばんこわいことですから、この四つだけはおこさないようにしましょう。謗法をおかしている人は、なんとなく生命力がない。なんとなくいやな顔をしています。なんとなくさえない。それから、なんとなく生活も暗いのです。これが事実の姿です。

そういうような気持ちになりかかったならば、それを乗り越えて題目をあげるのです。これを乗り

越えて折伏をし、それを乗り越えて御書を読み、それを乗り越えて先輩に指導を求めていくことが大切なのです。どんどん消していけるのです。

ですから、強い強い信心にたてば、そういうことは、しぜんに消えているのです。

経に云く「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」又云く「若し法師に親近せば速かに菩薩の道を得ん是の師に随順して学せば恒沙の仏を見たてまつることを得ん」

法華経化城喩品にいわく「在在諸の仏土に常に師と俱に生ぜん」――と。

師とは、御本尊です。永遠に大御本尊とともに生きていくことができる。大御本尊のおわしますところに、生ずることができるとのおおせであります。

「又云く」――これは法師品です。

「若し法師に親近せば」とは日蓮大聖人のことです。日蓮大聖人即御本尊ですから、御本尊に題目を唱えていくならば「菩薩の道を得ん」、正しい菩薩の修行をすることができるというのです。

「是の師」とは御本尊です。日蓮大聖人です。御本尊に随順して信・行・学に励むならば、「恒沙の仏を見たてまつる」ということは、成仏のことです。成仏することができるというのです。

釈に云く「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」云云、返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし

「本此の仏に従って初めて道心を発し亦此の仏に従って不退地に住す」

この釈は、天台大師の法華玄義の文です。「此の仏に従って」――仏とは日蓮大聖人です。また御本尊です。御本尊によって「初めて道心を発し」、また、御本尊によって「不退地に住す」――すなわち成仏する。絶対の幸福をえられるということです。

御本尊を離れて、途中どんなところへ行っても、幸福にはなれない。もっといい方法はないものかといって退転した人が、さんざん苦労したあげくに、やっぱり信心するしかないと、また御本尊にもどってくる姿があるでしょう。そのことをいうのです。ですから、初めから終わりまで御本尊を受持しきっていくならば、かならず成仏の境界をうることができるのです。

又云く「初め此の仏菩薩に従って結縁し還此の仏菩薩に於て成就す」――と。

これは、天台大師の法華文句の文です。ぜんぶ大事な信心のあり方をいっているのです。釈尊も天台も、このように示されているではないか、幸せになる道は、道理はこうなのだよ、と繰り返しくりかえし、おおせになっていらっしゃるのです。

釈尊の仏法の場合には、釈尊に結縁して、釈尊によって仏になるのです。また天台大師の場合には、天台大師によって仏になるのです。途中どこへいっても仏になりようはないのです。ほかをいくら探しても、それはまちがいなのです。いまの日本の国は、宗教界が闇のようなものですから、実際問題、一般の人々は、どこへどう求めていっていいのかわからないのです。

ゆえに「返す返すも本従たがへずして成仏せしめ給うべし」と念をおしていらっしゃるのです。

成仏のカギは「本従」をたがえないこと、つまり末法の一切衆生の成仏のための「本従の師」こそ、大聖人であると知った私どもが、どうしても日蓮大聖人のことを、御本尊のことを教える以外に道がないのです。私たちの使命は大きいのです。私たちの活躍は如来の使いなのです。その如来の使いをしているのですから、三世十方の仏菩薩、諸天善神が守らないわけはありません。

釈尊は一切衆生の本従の師にて而も主親の徳を備へ給う

この「釈尊」は、一往は、ここではインド応誕の釈尊のことをさしますけれども、釈尊といっても六種類あるのです。蔵教の釈尊、通教の釈尊、別教の釈尊、法華経迹門の釈尊、本門文上の釈尊、本門文底の釈尊です。末法今時においては、再往は「文底の釈尊」すなわち日蓮大聖人と拝すべきです。

この文底の釈尊は、私たち一切衆生の「本従の師」であり、「主親の徳」をそなえた御本仏である、

こうおおせです。主、師、親の三徳を明かしていらっしゃるわけです。

日蓮大聖人が、私どもの師匠です。永遠についていってまちがいのない師匠です。この三世にわたる根本の師匠にお会いできたゆえに、私どもはいちばん幸せなのです。

末法の衆生は、貪、瞋、癡、慢、疑という煩悩におおわれている。貪欲で、そしてすぐにおこり、おろかである。そのうえ慢心が強い。それであって疑い深いのです。

そうした人々を、そして社会を救済できるのは、絶対に日蓮大聖人の仏法しかないのです。

此法門を日蓮申す故に忠言耳に逆う道理なるが故に流罪せられ命にも及びしなり、然どもいまだこりず候法華経は種の如く仏はうへての如く衆生は田の如くなり、若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候、恐恐謹言。

建治二年丙子八月三日　　日蓮花押

曾谷殿

「此法門を……及びしなり」、これはこのままでいいでしょう。

「然どもいまだこりず候」――日蓮大聖人は小難数を知らず、大難四度であっても「こりず候」とおおせです。これは建治二年のお手紙でありますから、佐渡の国から身延へおはいりになっていらっし

るのです。でも「こりず候」です。

日蓮正宗創価学会も草創期より迫害の歴史でありました。皆さん方も批判をされきってきた闘争の歴史であると思います。だが、個人個人にしても、学会としても、どこまでもこの御文を拝して「いまだこりず候」と、この精神でいきましょう。

わずかこの一文でありますけれども、日蓮大聖人が「こりず候」とおおせになった御金言のとおり、生涯、弟子である私どもも、どんなつらいことがあっても、強い団結をして、それでにっこり笑って、「いまだこりず候」と、信心第一でまっすぐに進んでいきたいものです。

きょうはこれだけ覚えればいいのです。これが「成仏用心抄」の要です。

「法華経は種の如く」――妙法蓮華経は、成仏の種です。絶対に幸福になれる種です。「仏はうへての如く」、もったいない話ですね。「衆生は田の如くなり」――衆生は田です。

すなわち、末法の御本仏日蓮大聖人は、衆生の生命という田に、妙法の種をうえられます。この種を芽生えさせ、育て、実らせていくのは衆生です。せっかく正しい種をうえてもらいながら、育てる方法をまちがえたり、育てる努力を怠ったりして、腐らせてしまったならば実りません。成仏はできないということです。

今、私どもが如来の使いとして、一生懸命、この一切衆生に教えて、うえているわけです。これは折伏です。

成仏ができる原理は、謗法を責めること、折伏です。そして、謗法、十四謗法のうち、とくに最後

の四つの謗法に気をつけなさい。さきほど申し上げましたとおりです。

「若し此等の義をたがへさせ給はば日蓮も後生は助け申すまじく候」

この日蓮大聖人おおせの義に従順しなければ、違えるならば、あとは日蓮は助けてあげないよ、そのとき後悔しても知りませんよ、とのおおせであります。

私どもは、日蓮大聖人のおおせどおりのことを実践し、指導しているのでありますから、かならず成仏し、幸福になることは、これはまちがいないのです。

どうか、強い信心の人もいるでしょうし、また後輩の人のなかには、弱い信心の人もいるかもしれませんけれども、この日蓮大聖人のお教えを根本として、全世界に向かって「私ほどの幸福者はいない」といいきれる一人ひとりになっていただきたいことを切願するしだいであります。

（昭和三十七年八月九日）

# 日々の教学

（ここに掲げる講義は、昭和五十二年七月から十月にかけて「聖教新聞」に掲載されたものです）